

2021年5月16日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会

奏楽

前奏

招詞

イザヤ書 第54章10節

讃美歌

讃美歌 21-149 (わがたまたえよ)

交読

詩編 第122篇 (p. 142)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第14章22-26

(新約聖書 p. 91)

讃美歌

讃美歌 21-337 (たたえよ、この日)

説教

「人を生かすもの」

今日の聖書箇所には、「主の晩餐」という小見出しがついています。この小見出しは、口語訳聖書から今の新共同訳聖書に変わってからつけられたものです。この小見出しは無いほう

がいいと言う人もいます。確かにそう思う場合もないわけでは  
ありません。けれど、とても役に立つこともあります。今日の  
「主の晩餐」というのは、とても良い小見出しだとわたしは思  
っているからです。わたしたちはこの場面をよく「最後の晩  
餐」と呼びますが、本当は最後ではありません。甦られたイエ  
スさまが弟子たちと食事をなさったからです。もちろん今ここ  
で、最後かそうでないかを議論したいのではありません。そう  
ではなくて、もっと大事なことがあるからです。これは<主>  
が備えて下さった晩餐だということです。

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛  
美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた」。  
今の言葉で言えば、ここでのこの過越しの食事は、いよいよメ  
インディッシュに入る。前菜の部分が終わった。その時に、招  
待者、招き手であり、テーブルマスターである者が、立ちあが  
って賛美と感謝の祈りをしてパンを裂く。これは当時のユダヤ  
の食事、特に過越しの食事ではとても大切なことだったそうで

す。この時、その務めを担われたのがイエスさまです。この食卓をお作りになったのはイエスさまです。ここに招いてくださっているのはイエスさまです。新共同訳は「主」という言葉が、聖書の原本にはないにも関わらず、「**主の晩餐**」としました。「イエスの晩餐」とも言いませんでした。主イエス・キリストの「主」とは食卓の「主」、テーブルマスターを意味すると思う思いもあったかもしれません。そして、この主は、今、わたしたちと共に生きておられる方ですから、2000年の教会の歴史は、この主の晩餐を受け継ぐものだったと理解しながら、この表題を付けたと言ってもいいと思います。

このマルコによる福音書の主の晩餐についての記事は、教会が聖餐を執り行うときにしばしば取り上げられ、読まれる聖書箇所です。ただもう一つ、別の、パウロが書きましたコリントの信徒への手紙、第一の第11章23節以下があります。どうしてそちらを読むかと言えば、一つは、この主の晩餐について書き残されている聖書の記事の中で、このパウロの言葉が最

も古いと考えられているからです。そして、これが教会の聖餐において繰り返し読まれてきたこともはっきりしているからです。ただ、マルコによる福音書のこの簡潔な記事もまた、パウロの言葉に劣らないほど古い日付を持ちますし、イエスさまと一緒に食卓につくことが許された弟子たちの確かな記憶に基づいていることもまた確かです。

特にこのマルコによる福音書の記事で大切なところは、これが受難週の出来事が語り続けられているところで、そのひとこまとして語られているということです。イエスさまはここで、「これはわたしの体である」と言われ、また「これはわたしの血である」と言われました。言葉をお語りになられただけです。おかしい言い方ですが、そうおっしゃっただけです。イエスさまが、弟子たちの前にパンを差し出しながら、「これはわたしの体」だ、よく見ていてごらんと言われると、弟子たちの前でそのパンが肉に変わったというわけではありません。ぶどう酒が、ぶどう酒の香りを消して血の臭いに変ったというわけ

ではありません。パンはパンのまま、ぶどう酒はぶどう酒のままです。けれど、イエスさまは、「これはわたしの体」だと言われました。「わたしの血」だと言われました。わたしそのものだと言われました。「わたしのいのちそのもの」だと言われました。その信仰をわたしたちも変えることはありません。聖餐にあずかる時、その主そのものを食べます。主そのものを飲みます。主そのものをいただくということです。洗礼を受けた者がこのパンとぶどう酒を受けますが、それは、主そのものをいただく、それができるようになったということです。どうして洗礼を受けた者だけが受けるのか、と言われれば、それは、わたしの体だ、これはわたしの血だ、と言われる主イエスの言葉を、信仰をもって受け入れた者でなければ、パンをイエスの体として、ぶどう酒を主イエスの血として受け取ることができないからです。

半田教会では、日曜日ごとの礼拝で聖餐式を行っているわけではありません。けれど、説教者は聖餐台の後ろに立って

礼拝をつかさどります。それは、たとえ聖餐をここで祝わなくても、わたしたちの礼拝の中心は、いつも聖餐にあるということをはっきりと示すためです。教会によっては説教台と司会者の位置は、講壇の左右に分かれているところもありますが、聖餐台は真ん中にあります。ですから、牧師は何を語るのかと言えば、「これはわたしの体、これはわたしの血」と言われる主イエスの言葉を取り次ぎます。この「わたし」とは誰でしょうか。十字架に向かって苦しみの道を歩まれた方です。この「わたし」とは誰でしょうか。十字架にかかって亡くなられたその体、流された血をもっておられた主イエス、死人の中から甦らされた、その甦りのいのちに生きておられる方です。説教ではずいぶんいろいろなことを言いますが、基本的にはこの主イエスの救いの出来事を語っているだけです。説教とは理屈を述べることではない。思想を述べることではない。牧師個人の考えを述べることではない。では何を述べるのか。それは主イエスを物語る。主イエス・キリストの救いの話をする事、それに尽きます。神学生だったころ、当時の学長の松永希久夫先生

から言われました。説教者はいつも主イエス・キリストの話が  
できているかどうか、それがいつも問われていると。それは、  
信仰に生きているわたしたちが、すべてはここにあると、この  
主イエスの救いの出来事に自分の望みのすべてを見出すことが  
できているかということでもあります。

イエスさまはここでパンを取って、それを裂いて「取り  
なさい」と言ってくださいました。ひとつの杯を取って、皆に  
回し飲みをおさせになったようです。みんなが、その杯から飲  
んだと記されています。今はこういう状況ですからできなくな  
ってしまいましたが、奥田センターで聖餐式を行う時、パンだ  
けは皆の前で、ひとつのパンを裂いて見せて、牧師が「これは  
わたしの体」という主の言葉を告げていました。イエスさまが  
実際、どんなしぐさでなさったのか完全にはわかりませんが、  
少しでもそれに近いしぐさをすることで、主がなさったように  
できればと思っています。ただもっと大切なことは、み言葉が  
そこで聞こえるということです。「これはわたしの体、これはわ

たしの血」という言葉が、信仰をもって受け入れられるということ  
ことです。

しかもイエスさまは、そのことについてとても丁寧に言  
われました。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、  
契約の血である。はっきり言うておく。神の国で新たに飲むそ  
の日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決して  
あるまい」。

「神の国で新たに飲むその日まで」という言葉がありま  
す。この言葉についてはいろいろな読み方があります。たとえ  
ば、神の国で、新たに飲むその日とはいつ来るのだろうか。イ  
エスさまが甦りになった時はもう来た。実際に、イエスさまが  
甦られた時、イエスさまはエルサレムで、ガリラヤで、弟子た  
ちと一緒に食事を楽しまれた。その時、弟子たちは生きておら  
れるイエスさまと一緒に食事をしている喜びの中で、「ああ、神  
のいのちの支配、神の国はここに来ている」と確信したに違い

ないと思います。

もうひとつの理解は、教会が始めた聖餐です。使徒言行録などを読みますと、最初の教会が、まず何をしたかと言いますと、何よりも、日ごとに喜びながらパンを裂いたことです。第2章42節にこうあります。「**彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった**」。主の食卓、<主の晩餐>の食卓を作りました。イエスさまにもてなされることを喜びとする集団を作りました。それが教会です。そして、その中核にあった弟子たちは、こんなふうに思ったのではないのでしょうか。「ああ、あの十字架につけられる前に主イエスと共に在った時、わたしたちは自分たちの裏切りについても確信がなかった。そして実際に裏切って主イエスを捨てた。それにもかかわらず今わたしたちは、いいや、まさにそんなわたしたちであるからこそ、主の恵みを語り伝えながら、主の物語をしながら、このパンを裂く、ぶどう酒を分かち合う仲間を作ることができる」。そんなふうに語り合いながら食卓について、喜

びに溢れたと思います。

そして、もうひとつの理解は、こうした教会の歴史がやがて終わって、主が再び来られる時のこととすることです。主が神の救いを、すべて全うしてくださる時、大宴会が開かれるのだという望みです。それもまた、真実なことだろうと思っています。

牧師にとって忘れられない恵みの一つは病床洗礼ではないかと思っています。もう教会に来ることができなくなった高齢の方や、重い病にかかれて治る見込みのない方が、さまざまな人の導きもあって、病床で洗礼を受けたいと申し出られて、急いで準備をして、牧師と役員と一緒に病室に赴き、信仰の言葉を聞いて、洗礼式を行うということがありますし、半田教会も昨年、病床洗礼が行われました。大きな声を出せない方が、ようやく振り絞るような声で、「わたしはイエスを信じます」と告白される。そこには家族がおられる。親しい者がい

る。もしかすると、今ここで、洗礼を受けることにいったい何の意味があるのか、と思われた方もいたかもしれません。病気が治るわけではありません。身体の痛みが、減るわけではありません。目に見える形においては、何も起こらないかもしれません。けれど、その方がそこで望まれたことはとても大切なことです。死すべき体を、「溢れるいのち」をもって包んでしまうからです。その方のこの地上での肉体としての息は、間もなく絶えるかもしれません。そうなれば、礼拝堂にまで、その亡骸を教会に運び、葬儀式を行い、お墓に葬る以外の手はありません。けれどそこで、「これはわたしの体、わたしの血」と言ってくださったイエスさまの存在そのものの命は、その人に注がれ、包み、その墓の限界を越えて、その人を神と結びつけます。ですから、そうした場合、洗礼式が行われたあとすぐにその場で、その方と一緒に聖餐式が行われます。もう何も喉を通らない、そういう方であっても唇で杯に触れていただき、パンに口で触れていただきます。それはキリストに触れることです。キリストがその方のなかにも住んでくださる事実を確認す

ることです。

今日礼拝において聖餐は行いません。けれど、ここに聖餐台があります。主の食卓があります。ここにもいのちが溢れています。この教会を包み、また教会の中に溢れる主イエス・キリストのいのちです。この恵みが、今ここにいるお一人お一人、そしてここに来ることのできない兄弟姉妹の上にも、なお生かす力を持つようにと祈ります。

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さま、週の初め、ここに招かれ兄弟姉妹と共に礼拝を守ることができ感謝いたします。わたしたち一人一人が心を込めて礼拝を守ることができ、感謝いたします。わたしたちが注ぐ心以上に、あなたの愛がここに注がれ、主のいのちがここを満たしていることを信じます。日々自らの弱さを覚え、罪の愚かさを数えるしかないわたしたちを、どうかあなたの、主の恵みをもって覆い、常に新しい望みへと奮い立たせてください。とりわけ



後 奏

<礼拝終了>